

# 麦作

## 「北海道 麦作りに挑む人々」その3

虻田郡真狩村 <sup>き</sup>木 <sup>や</sup>谷 <sup>じゅん</sup>潤 <sup>いち</sup>一 氏

### 1 はじめに

木谷氏（65才）が住む後志管内の小麦作付面積は、畑地面積の約6%（平成24年数値より算出）と畑作地帯としては比較的少ない。

また、秋播き小麦（以下、小麦）の反収では、主な振興局の7中5平均（19～25年までの最高、最低を除いた5年平均）で下位から4番目に位置している（図1）。

道内でも有数の豪雪地帯として名高く、長い積雪期間が足かせとなり反収が伸びないのは想像に難くない。

しかし、畑作や野菜の安定生産を目指すには、輪作体系の確立は避けてはとおれない課題である。さらに小麦の反収が安定し、ある程度の面積を確保することができれば、経営にとっても大きなプラス要因となる。

今回は、後志管内でも反収の高い真狩村で、

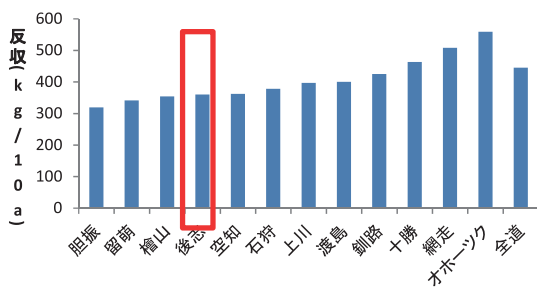


図1 主な振興局の反収



写真1 木谷氏

高収量を上げている木谷氏の小麦栽培について紹介したい（写真1）。

### 2 地域の特徴および経営概要

#### (1) 後志の気象および土壌条件

後志の気象は、日本海側気候に属し、一般的に春から夏にかけては温暖で晴天に恵まれる日が多い。しかし、冬は北西の季節風を受け、降雪量が多く、根雪は11月中旬から4月中旬にまで及ぶ。

また、複雑な地形のため、地域によって気象はかなり異なり、冬はその差が著しく現れる。特に真狩村を含む羊蹄山麓地帯では、本道の中でも初雪が早く、道内屈指の豪雪地帯

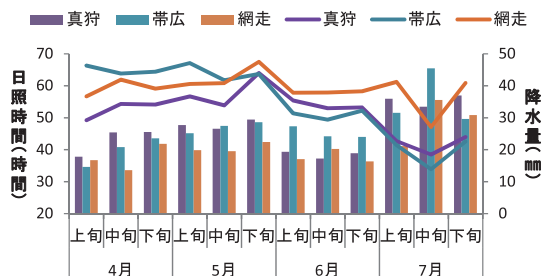


図2 3地区の日照時間と降水量の比較

(アメダス1981-2010年の平均)

(折れ線～日照時間、棒グラフ～降水量)

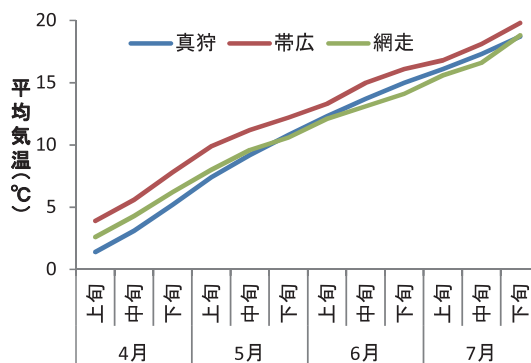


図3 3地区の平均気温の比較

(アメダス1981-2010年の平均)

である。

土質は、高台が黒ボク土で排水は比較的良い。平場地帯は褐色低地土で、排水性にはやや難がある(図2、図3)。

(2) 経営規模と作付構成

木谷氏の経営面積は30haで、内借地は10haとなっている。栽培作物は、ばれいしょ、大・小豆、スイートコーン(生食・加工用)、ブロッコリー、春・秋播き小麦、にんじん、ユリ根、カボチャ、アスパラガスおよび緑肥(エンバク野生種)と作目が多い。各作物の面積と輪作体系は、表1、図4のとおり。

3 小麦栽培の経過と特徴

(1) 輪作の状況

小麦の前作はばれいしょで、三品種のばれいしょの内、早掘りの「男爵薯」と「とうや」

表1 作付割合 (H27年)

作目名	作付面積 (ha)	作付割合 (%)
アスパラガス	0.3	1
カボチャ	1	3
ユリ根	1	3
にんじん	1.5	5
春播き小麦	2	7
秋まき小麦	2	7
大豆	2	7
ブロッコリー	2	7
スイートコーン(生食・加工)	2.5	8
小豆	4	13
緑肥(エンバク)	4.7	16
ばれいしょ	7	23
合計	30	100

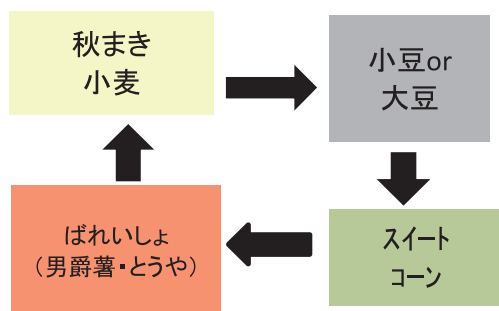


図4 輪作体系

の掘取り後に小麦を播種している。麦作率が、春・秋播き小麦を含め13%と少なく、5年以上の輪作体系となっている。この他に、緑肥の栽培もあるため、かなり余裕をもった輪作体系となっている。

(2) 収量・品質 ～「きたほなみ」は作りやすい～

木谷氏の小麦栽培の歴史は古く、後継者となった頃からすでに栽培されていた。これまで、「ホロシリコムギ」、「チホクコムギ」、「ホクシン」、そして「きたほなみ」と4品種の栽培を経験している。

この中で、「きたほなみ」は比較的栽培しやすい品種で、この地域に適していて「とにかく、倒さなければ確実にとれる」品種だと言う。

その理由は、①分けつがしやすく、莖数を確保しやすい②止葉期追肥をしても、タンパクで基準値を超えることはない③稈が丈夫で倒伏しにくい④穂発芽がしにくいことなどである。

木谷氏の3ヵ年平均の反収は、615kg/10a。町平均の約1.3倍と高い。また、1等麦比率は約85%。26年産の小麦品質評価項目は、Aランクであった(図5、表2)。

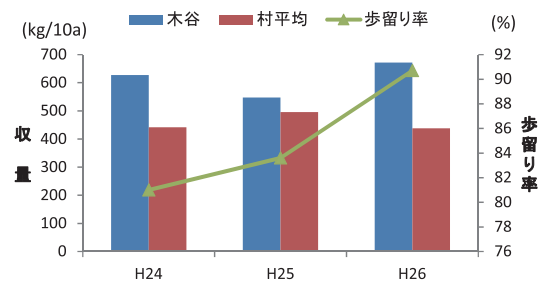


図5 木谷氏と村との反収推移

表2 品質測定値 (26年産)

容積重(g/l)	F.N. (sec)	蛋白含量(%)	灰分含量(%)
868	405	10.8	1.27

## 4 技術の特徴

### (1) 輪作に勝る技術はなし ～5年輪作を守る～

畑作物の中で連作障害や病害に弱いとされる小豆でさえ、5年以上の輪作体系を守れば病害発生心配はほとんどない。もちろん防除の必要もない。稀に害虫の多発生年があるので、そのチェックさえ怠らなければ心配ない。

小麦の場合、連作による病害の発生はほとんどみられない。しかし、赤かび病などの通常防除には万全を期している(表3)。

耕作面積30haで、12の作目を14筆の圃場で栽培管理していることから、労力面での大変さはあるものの、農繁期を除いて本人と息子夫婦を含めた4人の労働力でまかなっている。

「少量多品目」による輪作体系により、今のところどの作物も極端な減収はない。また、防除費の低減も相まって経営の安定化に繋がっているものと思われる。

### (2) 倒れたらおしまい ～そのために無理な栽培はしない～

「きたほなみ」の播種量は、9月15日播き

で約9kg/10aとかつての品種の播種量に比べ約30%少ない。当地区の積雪期間を考えると、220粒/m<sup>2</sup>前後の播種量が必要と思われる。

また、窒素施肥量は基肥4kg/10a、起生期6kg/10a、止葉期4kg/10aの合計で14kg/10aをベースにしている。肥料が少し足りず、もう少しやりたいと思う時もあるが、無理をせずにジッと見守っている。

と言うのも、起生期追肥のやり過ぎで早期に倒伏し、減収した経験もあることから無理をせずに、「ほどほどの麦作り」を心がけている(表4)。

### (3) 有機物補給を計画的に

小麦の収穫後には、牛糞堆肥を2t/10a投入している。この堆肥は、近隣の酪農家との間で麦稈と交換したもので、1年間腐熟させて利用している。

また、にんじんやブロッコリーなどには、発酵鶏糞を約60kg/10a使用。他の作物には、発酵した豚糞堆肥を年間6t(600kg/袋のフレコンパック)ほど使用している。

この他にも緑肥栽培(エンバク野生種)をして有機物補給を行っている。

表3 病虫害防除等 (H26年産)

除草剤散布		融雪促進		融雪期	病虫害防除(植物成長調整剤等)			備考
時期	剤名・散布量	時期	資材名・散布量		対象病虫害防除	時期	使用薬剤・散布量	
9月19日	ガルシアフロアブル	3月20日	融雪炭カル 60kg/10a	4月15日	アブラムシ	6月10日	エルサン乳剤 1000倍	
					赤かび病		ストロビーフロアブル 2,000倍	
					赤かび病	6月19日	トップジンM水和剤 1,000倍	
					アブラムシ	6月28日	バイスロイド乳剤 2,000倍	
					赤かび病		ストロビーフロアブル 2,000倍	

表4 耕種概要など (H26年産)

は種(kg/10a)			土性	施肥(kg/10a)					根雪始	雪腐病防除	
期	量	方法		区分	窒素	燐酸	加里	月日		時期	使用薬剤名
9月12日	10	ドリル播き	黒ボク土	基肥	4	12.5	5	9月12日	H25.11.19	H25.11.17	リゾレックス ベフランフロアブル
				追肥							
				起生	6.3			4月20日			
				幼形	—						
				止葉	4.2			5月20日			

#### (4) 耕起・碎土・整地・鎮圧

秋播き小麦の前作は、早出しばれいしょと  
言うこともあり、次のような作業体系となっ  
ている。

- ①スタブルカルチ1回
- ②パワーハロー1回
- ③施肥・播種（田端製プランター12条播き）
- ④ローラ1回（播種後直ぐ）

特に圃場の状態をよく観察し、土壌水分の  
下がり具合を判断しながら耕起・碎土・整地  
のタイミングを図っている。そして、齊一な  
出芽を目指している。

#### (5) 雪腐病対策 ～無人ヘリの活用～

多雪地帯にとって、雪腐病防除が必須であ  
ることは言うまでもない。今でこそJAに委  
託した無人ヘリにより雪腐病防除を実施して  
いるが、それ以前は天候不順などで防除機が  
圃場に入れず、実施出来ずに大きな被害を受  
けた年もあった。無人ヘリの利用により、こ  
の問題が解消されたことは大きい。

また、出来るだけ積雪期間を短縮し雪腐病  
の被害から守るために、融雪材散布も重要と  
なる。できるだけ融雪を早め、圃場を乾かし  
起生期追肥を迅速に出来るかがその後の生育  
の「カギ」を握る。

#### (6) 排水対策

圃場暗渠の実施は、補助事業により約20年  
毎に施工している。心土破碎は、ブルドーザ  
により秋か春に数年に一度の頻度で行い、サ  
ブソイラでは毎年実施している。

また、収穫後の耕起作業は、スタブルカル

チにより秋に実施する。しかし、秋に余裕が  
ない時には春に実施している（写真2）。

## 5 今後の課題

### (1) 秋播き小麦の栽培面積の拡大

前述したように、春・秋播き小麦の作付比  
率は13%と輪作体系上からも面積拡大の余地  
はある。しかし、JAの乾燥・調製施設の受  
け入れ体制に限界があり、面積拡大は適わず、  
今後の施設整備拡充が待たれる。

いずれにしても、緑肥作付分を小麦の面積  
に置き換えることができれば、より経営的な  
メリットも生まれると思われる。

## 6 おわりに

真狩村は、北海道におけるジャガイモシス  
トセンチウが最初に発見された地として知  
られている。主な畑作物面積の占めるジャガ  
イモの作付割合（平成23年産）は約40%と高  
く、逆に小麦の作付割合は9.3%と低い。ば  
れいしょは、豊凶の差がなく経営的には安定  
した作物として位置づけられる。しかし、将  
来的には連作や過作による、連作障害による  
減収として経営を圧迫すると思われる。

木谷氏の経営をとおして、しっかりした輪  
作体系の確立こそが「技術の基本」であるとの  
印象を強く受けた。そのためにも小麦栽培  
の安定確収栽培が強く求められている。

### <木谷氏のコメント>

小麦の栽培技術を含め、様々な経験を息子  
に引き継ぎつつある。麦の反収は、最近安定  
しているが、先の事はどうなるか解らない。  
引き続き気を緩めないで安定生産に向けて頑  
張りたい。

（文責 北海道米麦改良協会 高橋 義雄）



写真2 木谷氏の小麦圃場